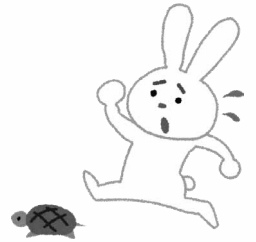




# 「伝えること」は コミュニケーションの入り口



言葉は相手に自分の考えを伝えるための大切なものです。

伝えることは、コミュニケーションをとるための入り口にすぎません。最終的な目標は伝えたい内容が理解され、相手との間で一定の合意がなされて初めて、コミュニケーションは意味をもつのであると思います。

さて、学校ではどのような道徳の時間の指導（人権教育）が実施されているかについて、人権シリーズで考えたいと思います。平成30年4月1日より、小学校では「特別な教科である道徳」（以下道徳科）が全面实施されることになりました。（中学校は来年度より実施）今までは、副読本を基に進められてきましたが、これからは児童生徒が教科書を使用することになりました。今回の改定では、「考える（議論する）道徳」へと転換を図ることが求められています。

それではみなさんも資料を通して考えてみましょう。文章の最後の□の中に、どんな言葉を入れるとよいかを家族で話し合っていたら、深い学びができると思います。

## 【ウサギとカメ】要約

今日も、キツネとおしゃべり

をしていると、ウサギがやってきてカメをからかいました。

「ふくん、のろすけじゃなくてカメねえ。では、その証拠を見せてもらいたいなあ。」

「証拠？」  
「そうさ。きみがのろくないっていう証拠さ。ぼくとかけくらべをして。」

「・・・かけくらべ。」

カメは、つばをのみこみました。どうやっても、はねていくウサギには勝てそうになかったからです。でも、カメにはカメの誇りがありました。

「わかった。勝負をしよう。」  
カメは、きっぱりといいました。

「これは、ごりつぱ。では、ゴールはこの山のとっぺん。審判はキツネくん。いいね？」  
「うん。」

キツネはしぶしぶうなずきました。  
「よいい、どん。」

キツネの合図で、ふたりはとびだしました。ぴよん、ぴよん、ぴよん。カメは、のろのろ歩いていくだけです。それも、びつしよりあせをかきながら。ウサギは、山の中ほどから、ふもとをふりかえりました。カメの姿は、どこにも見えません。

「やっぱりね。あのろさだもの。では、ひと眠りさせていたどうか。それからでも、じゅうぶん、じゅうぶん。」

ぐー、ぐー、ぐー。ねむっているウサギの横をカメが登っていきました。

「うんしょ、こらしよ。」  
「ああ、よくねむった。」

ウサギは大きなあくびをして、とびあがりました。小道に、カメの足あとがあったからです。

「まてー。まて、待てー。」

ウサギは一目散に追いかけてましたが、かけても、かけても、カメのすがたは見えてきません。（ま、まさか！）そのまさかでした。山のとっぺんで、カメが笑っていました。キツネに、右手を高くあげられて。そのキツネが、カメのこうらをこつこつたたきながらいいました。

## イソップ物語（ポプラ社）

このお話は誰もがよく知っていますが、小さい子は小さいなりにどんなことに気づき、□の中へどんな言葉を入れるのが楽しみです。ウサギをダメという見方をする子もいるでしょう。大人でも、ウサギの生き方は油断大敵でダメだと同調する

人もあるでしょう。しかし、ウサギの生き方に共感する見方をすることも、大切にしたいと思うのです。学校では、一方的に登場人物の生き方を否定することをしないのです。それは、普段子どもたちの生活を見ていると、「のらりくらり」とした態度もあるからです。即ウサギを否定することに繋がるからです。誰しも、「ゆとり」をもった生き方をしたいと思っていますが、いつの間にか「ゆるみ」になりがちなので、ウサギの思いに心を通わせていく子になってほしいと思います、多様な角度からものを見る（共感する）考え方を大切にしていくのです。

「善・悪」と安易に決めつけるのではなく、一つ一つの言動にはそれなりの考えが潜んでいることを考えながら生活できれば、心の広い人間として成長していくのではないかと思っています。もちろん、ウサギが「コツコツ頑張ること」は目標であります。しかし、その言葉しか□に入らないと考えるのでは「考える道徳」にはなりません。相手の思いに寄り添い、考えて伝えることがコミュニケーションの入り口・第一歩だと考えます。